

再び、牧場へ そして原点に戻る

馬に教わるリーダーシップ

第14話 馬がくれる不思議な「惹きつける力」

2015年6月4日（木） 小日向 素子

思い起こせば、去年の夏も真っ盛りの頃。お誘いを受けてこの連載を開始させていただき、はや14話目。

最初はとにかくワクワク。「馬」を先生にする体験をドキュメンタリー風にお伝えしつつ、馬に教わることによる効果とその背後にある理由（身体的な構造やその理論）をお伝えしていきたいと思っていた。しかし、馬の世界の話は、ずぶずぶと深く、だんだんと私の学びの速度と深度が連載に追いつかなくなってきた。これはまあ連載当初から予測できたこと。「私の学びが、連載の進み具合に追いつかなくなる日がくるよね」と。

そして、そのときがきたようだ 本来、この回では「馬に教わるゼロ・センス」とでも題して、直近数回にわたり書いてきたゼロ・センスについて私なりの最終理解を書く予定だった。アドラー心理学との共通項を探ることで、「馬に教わる」ことの根底にある哲学を浮き彫りにできるのではないかと思い、アドラー心理学の巨匠と実際にお話をさせていただきもした。しかしどういいうわけか、それを記事に書こうとすると「言葉がまだ自分の身体に落ちてこない」という感覚がぬぐいきれない。まだ書いてはいけないように思い、何となく今日までできてしまった、というのが実情。

と、ここまで書いて、ハタッと膝を打つ。

こういうマインド、企業人だった頃にはなかったものだった。

「Cost per “X”」という価値観で日々の仕事に取り組んでいると、それがすべての思考と活動に伝播していつてしまう。本来は、じっくり待つて熟成してから発言したり実行したりすべきことでも、「不確実」な世界の中では誰もが確実な答えなんて知らないのだから、スピードのほうが価値が高いとばかりに、3割の完成度でも先に進めてしまう。そして、実際そのほうが、経済的、短期的には、うまく（問題なく）いったりすることが多い。

私は、そうした「常にうまくいくほうに乗る」人間だった。それが悪い、というわけではないのだけれど、うまくいくことがすべての基準になってしまうと「私の魂」は失われてしまう。これまでも書いてきたように、私の魂は、相当に分厚い「蓋」がされている状態だと思う。

それが、なんとなく、変わり始めている気がする。

原稿ひとつ書くにしても、「期待されている内容を、予定のタイミングで、取りあえず今の考え、ということで公開しておいて、後で検証すればいい」というような振る舞いができなくなっている。もしかすると、そうした効率の良さ、「うまくいく」、あるいは「合理的」な言語には、嘘や隠蔽を含まざるを得ないことに、改めて気づいて、立ち止まっているのかもしれない。

本当はまだ腑には落ちていないことを、簡単に言語化して伝えることで、場合によっては、人を、そして自分自身をも惑わせてしまう可能性があるかもしれないのだ。

立ち止まるにも力が必要だ。「早くやればうまくいく神話」から抜け出すことも必要だ。

それは、会社員（組織人）には難しいことなのではないだろうか。合理性、効率、社会的経済的にウケる、うまくいくといった視点から、物事の本質、根源的なものに嘘がないかと立ち止まり、気づいていくことは、結果として、企業（人）にとっても大きな意義のあることだと思う。

1カ月ぶりの馬との出会い



こうした私の心境の変化はなぜ起こっているのか？

それもやはり、「馬」の効果、だと思ふのだ。

馬という、人間の上辺の思考とは関係なく存在する生き物の力に触れた効果ではないかと思っている。

振り返ってみるに、昨年12月にフランスのネイティブホースである「カマルグ」という種の2歳のメスの馬、ストーミーを「私の馬」にさせてもらったあたりが、きっかけだったのかもしれない。できる限り、ストーミーのいる埼玉県の牧場に通って、馬の世界で、馬の言語を語る時間をもつように努めるようになった。とはいうものの、今年に入ってから、1月から3月まで、欧州、高知、神戸、スリランカ、再び欧州と引きも切らず出張をしており、ストーミーに会いに行く時間がかなり限られていた。それで結局、1カ月も間が空いてしまう、という事態になってしまったのだった。

1カ月ぶりにストーミーに会いに行く日の朝。

「ストーミー、私を忘れていたらどうしよう？ いやいや、馬は個人を認識しないんだった。関係ない。」

そう思っても、なんだか緊張して、ソワソワしてしまう。

会社員でいうならば、病欠とか自分都合の休暇を1カ月とって、久しぶりに出勤すると、なんとなくその日は緊張するのではないかと思うのだが、そんな感じ。オフィスに入って、同僚たちが私の姿を見たときに、どんな反応をするだろうか？

「大事なときに1カ月も休んで、なんなんだ？」と思われているのではないか？とか、休んだ分も死ぬほど頑張らなくてやらないと。でも、できるかな。みんなはどう思っているんだろう。期待しているのかな。もう戦力外と思われているのかな？などと、相手の反応を勘ぐって、ドキドキ、ソワソワ。

同じように、

「ストーミーはどんな反応をするのだろうか？」
とドキドキ。

牧場に着くと、ストーミーの姿が、放牧場の遠くに、小さく見えた。満開の桜の下。まるで花見をしているかのように上を見上げている。

いやいや、そんなはずはない。すぐに頭を落として、草を食む。

「そりゃ食欲だよな」

放牧場の柵まで近づく。すると、遠くで、ストーミーが顔を上げる。位置的には、私はストーミーの胴体のやや後ろにいる。ストーミーの視界は350度。だから、私の姿は視界に入っている。顔を上げたのは、きっと、偶然ではない。私は、少しだけ右手を動かす。するとストーミーもわずかに顔を私のほうに向ける。うん、やっぱり気にしている。

馬との対話はいつも微細な動き、ときには目に見えない「気」のようなものに支配されている。私は嬉しくなって、結果、頬の筋肉が収縮したと思う。するとストーミーはゆっくりと、こちらに近づいてくる。静かに、互いの存在に気がついていきますよ、興味ありますよ、という合図の送りあいの中で、ストーミーは私のいる柵

の目の前まで近寄ってきてくれた。そして、横顔を私の身体に並べるようにおいた。

「ふう～」と息を吐く。

この、あるともないともしれない（他の人からみたらないように見えるであろう）、微細な対話の積み重ね。

馬の言語でコミュニケーションをすると何か深い充足感がある。

湧き上がるエネルギーの交換



この後、ストーミーをていせん場（ブラッシングをしたり、馬具を装着したりするための場所）に連れて行き、いつものように、ブラッシングをしようと、ストーミーの左斜め前に立って、ストーミーの顔と身体全体としっかり向かい合わせたとき、身体の真ん中にエネルギーが湧き上がってくるのを感じた。

言葉にするのは難しい。とても嬉しいときに湧き上がるような力。生命力の塊みたいなパワー。

思わず、

「君って、何者?! スゴイっ!」

と声を上げてしまったほどだった。

朝、ストーミーに会うまでの、ドキドキなどまったく不要だった。

人間世界では、相手との関係性について自分勝手に浅はかな思考を巡らせる一方で、「いまここ」の関係性にはほとんど無頓着になってしまうように思える。

ストーミーとの再会で感じた強いエネルギー。今まで、私が人間界で作りに上げてきた様々な関係性の中でも相当強いエネルギーだ。例えが悪いかもしれないけれど、人生で一回だけの一瞬惚れ! くらいの衝撃かもしれない。知らず知らずに、私の中の感受性やコミュニケーション回路の感度が良くなっている気がする。

人間界のルールや言葉の通用しない、「馬界」という異界においてコミュニケーションを重ねるということは、私の中に新しいコミュニケーションのための回路をつくっているのかもしれないと思うのだ。普段、大脳新皮質の左脳部分だけが主に作動して、他とは隔離されているのに、右脳、馬脳、脳幹、それから、身体全体に至るまでつながる回路ができて、わずかながらに作動しているような感覚がある。

そして、さらに面白いことに、ストーミーに感じたこの感覚は、1回だけで終わることがなく、またストーミーだけで終わることもなかった。同じような感覚を、わずかの間でも「馬語」でしっかりとコネクした馬たちには、同じように感じるのだ。

今年1月のこと。私は、ドイツ、オランダ、ベルギーを回って3頭の馬を買い付けるツアーに参加した。馬のプロでない私がそんなツアーに参加できるなんて、大それた、かつラッキーな話だと思う。このツアーの詳細を話すと長くなるので割愛するが、それぞれの国で偶然の積み重ねの末、たくさんの馬たちの中から、私たちのところへ来る3頭が決まった。

つい先日、その3頭が無事に日本に到着。不思議なことに（と感ずるのだが）、わたしはこの3頭のことを気になってならなかった。そんなある日の午後、3頭が、ス

トミーのいる牧場に午後7時までトランジットでステイしている、との情報をもらった。

私は即座に予定を変えて、往復4時間をかけて会いにいった。以前の私にはこういうところはなかった。性質的にわりとクールというか、他者に対してつながり感というものをあまり抱かないタイプ。自分でも驚きの変化だ。欧州で出会った馬3頭は、接触した時間はとても限られていたし、一緒にトレーニングをしたわけでもない。でも、いい！と直感的に感じた馬たちばかり。実際に会って、彼らに声をかけたり、触ったりすると、私の中にトミーとの再会で感じたあの充足感が湧いてきたのだ。

異界とつながる技術



馬とのコミュニケーションがもたらすこうした感覚を、ぜひ多くの人に味わってほしいと思う。

「知り合いは多いけれど、ほんとうの友だちは少ない、あるいは、いないかも」
「会社ではみんなとそれなりに仲良くやっているけれど、本当に心を許しているのは家族だけかな」

とか、はたまた、

「まわりの誰かと本当に信頼しあえているか分からないなあ。あんまり他人に興味ないなあ」

と日ごろ感じている方がもしいたら、きっと新鮮な体験になるはずだ。

最初に私がストーミーに惹きつけられたときは、自分の子どものような存在に対して感じる特別な感覚なのかと思っていたのだけれど、どうやらそうでもない。純粹に相手の命の力に惹きつけられ、エネルギーが湧いてくるというほうが近い。

私がストーミーや他の馬たちに与えているエネルギーは、彼らが私にくれているものよりも、今はずっと低いと思う。けれど、私の中からも彼らと同様のエネルギーが湧いてくるようになったら、馬たちは私にもっと惹きつけられるのではないか？そして、その私から溢れ出るエネルギーは、人間界でも他の人たちを惹きつけるのではなからうか？

リーダーシップ研修で「人間的魅力」が大切、とはよく言っていたけれど、それをどう育むかは難しい。人間的魅力を育むメソッドで、私自身が「これだ！」と思うものには出会わなかったが、馬とのコミュニケーションはとても有望なメソッドだと思う。

馬に教わるリーダーシップ、チームワークはとっても深い。

単なる「異界と繋がる技術」=類まれなコミュニケーション力を得るだけでなく、異界で感じることのできる圧倒的な力とつながり、人間的な魅力を身につけることでもあると思う。

運命の流れは不思議なもので、この数カ月間に、企業研修や人材育成のプロフェッショナルの方々に出会い、ご共感いただき、プログラムの模擬実施が始まっている。わずかな時間ながらその可能性について共感し始めてくださっている。次回から、そうした企業研修の模擬プログラムの様子を書いていきたいと思う。

今日書いたことと「ゼロ・センス」は、もちろん関連している。そのつながりについての物語は、私がこれだ、と思う体験をするまで、もう少し時間をください。

| このコラムについて

馬に教わるリーダーシップ

外資系IT企業日本支社の部長としてマネジメントに奔走していた「私」は、リーマンショックに伴う業績悪化から突然解雇される。新規ビジネスの立ち上げを模索する中、以前から疑問を抱いていた自分自身の統率力やコミュニケーション能力に向き合うきっかけがやってくる。それは偶然からの「馬」との出会いだった。

群れで生きる馬は、そのときどきの生存環境に最もふさわしい資質を持つリーダーに一期一会で従うという。言葉を理解しない馬と意思を疎通するうちに「私」は自分なりのリーダーシップ、そしてコミュニケーションの本質について学んでいく。

人間の振る舞いを鏡のように映し出す馬を通して、卓越したリーダーシップ、優れたチームワークとは何かを探し求めていくオン・ザ・ウェイの物語。

copyright © 2006-2019 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.

日経BP社